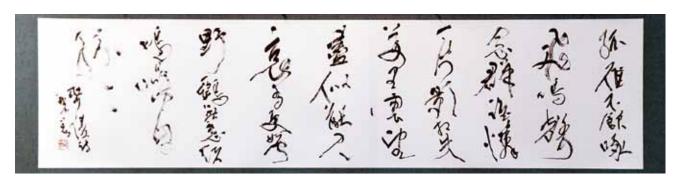
るできるある。





飯 行僧 粥

道元正法眼蔵



孤雁飲啄せず

飛鳴して声は群を念う

誰か憐む一片の雲

万里の雲に相失うを

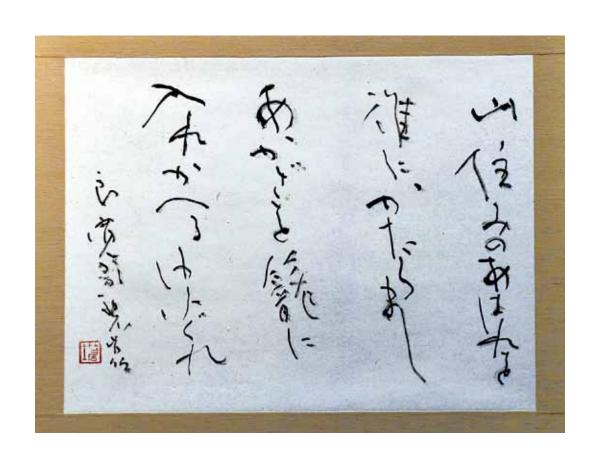
望み尽くして猶お見るに似

哀しみ多くして更に聞くが如し

野鵶意緒無く

鳴噪自ら紛々たり

杜甫詩



山住みのあはれを

誰にかたらまし

かへるゆふぐれ

あかざ籠に入れ

良寛



凄々秋風の裡 信宿す白衣の家

一衲と一鉢と 蕭灑たる此の生涯

良寛詩



以って 岫を出ず

雲



長嘯して待つ有るが如し 獨たちて修竹の下窮谷に佳人有り 容姿間にして且雅なり

良寛詩



学不如

学ぶに如かず





曠懐雲雀に随い

沖融として彼の蒼に入る

岩井 碧水

嫩竹新粉を含む 紅蓮故衣を落す 渡頭燈火を起る 処処菱を採って帰る 寂寞として柴扉を掩う 蒼茫として落暉に対す 鶴は松樹に巣くうて遍く 人は篳門を訪ねること稀なり

主度結婚等生



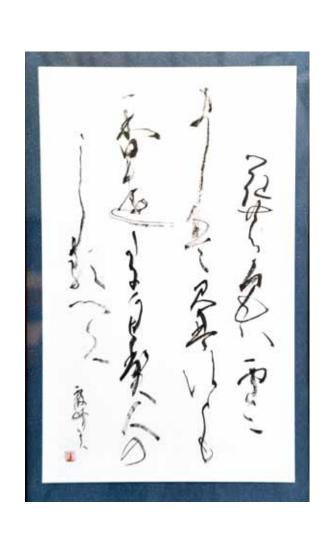
琴を聴く

生方 行純



之 陰 妙 陽 僧坊昼も亦た静かに 鐘磬寒くして 逾 清し風は落帆に従って休み 天は大江と与に平らかなり





静かに座す 山齋の月 清谿 遠流を聞く



も類べ久 香遠多尓匂へ人乃 の

まじ利天見盈須とも

花農色ハ雪ニ